「庭の一隅」
1965年、シュガーアクアチント・紙、46・5センチ×51・0センチ

駒井哲郎（1920～76年）

〈名画の扉〉 大川美術館企画展から

駒井哲郎は、高い技術にささえられた詩情豊かな銅版画によって、国内外で評価されていました。銅版画という小さな画面のなかに、どれだけ深い世界を見せることができるのか。その可能性を追求することが、生涯にわたる課題であったともいえます。

とはいえ、一方で時代の新しい動きにも敏感でした。当時、美術界ではアンフォルメルなど抽象表現主義が席巻して以来、抽象絵画が隆盛でした。行為の痕跡としての筆のあとが表現になったのです。

ここで試みられている「シュガーアクアチント」とは、砂糖水にアラビアゴムを混ぜた溶液をつかって版面に筆で描き、乾いた後にグランド（防触材）を塗布して、描画部分をぬるま湯で溶かしてしまう技法です。この技法であれば、筆あとを残すことができます。

庭のカタツムリをモチーフにしていながら、実験的な試みをしていたのです。

（田中淳）